

青の色彩表象

井 本 英 一*

今から50年前のイランの首都テヘランは、パハラヴィー王朝創立30年目の近代化の入り口にあった若々しい国であった。欧州諸国の都市のように戦災を蒙っていなかったので、イランで仕事をする日本人は中東のバリだといって生活をエンジョイしていた。当時はまだカージャール王朝末期の面影を多分に残していた。市内にも民家が商店と混在していた。民家の入り口の扉は、厚さ3センチほどの板でできていて青く塗られていた。扉にはノッカーが付いていて、それを叩くと家人あるいは使用人が出てきて錠前を開けてくれた。

以来、イランの地方を旅したが、入り口が青く塗られているのが印象に残った。北アフリカ、イタリアの古い民家の扉も同様であった。住民の信仰では、青は魔除けの色であると言う。ノッカーの円環の下部には怪獣の頭部があしらわれているが、これも邪視除けとして説明される（動物の頭あるいは悪魔的な人面は結果的には除魔の役割を果たすが、原初的には祖先あるいは祖先獣の表象であった）。青い扉は中央アジアから中国にわたっても見られるので、共通した観念があったに違いない。

古代東アジアの神殿や宮殿は、柱も壁も朱一色で塗りつぶされた観があるが、入り口の扉と窓枠と横棧よこさんあるいは連子れんじは、青あるいは緑で彩られている。朱と青あるいは緑の配合は絶妙のコントラストで、安定性を表現し

*元本学文学部

キーワード：青、死と再生、境界、青衣、朱雀と青雀

たと解されるが、扉や窓は人間や神にとっての入り口とされたことに注目しなければならない。このことについては後述する。日本の現代建築では、入り口の格子戸は生地そのままであったり、通りに面した窓の外がわの縦椽や柱と同様にベンガラ塗りになっている。木材の耐久性を高める処置であるが、古い時代の色彩の伝統があるのかも知れない。

古くから続く大店やおおだな^{おおだな}や老舗^{しにせ}の入り口に掛かる暖簾^{のれん}は紺色である。近代ふうの暖簾は白地に屋号を書いたものがあるが、伝統を踏んでいないと考えられる。暖簾は布であるが、古くから室内で用いられた玉簾など、布以外の材料を使ったものもあった。室内に使った簾は布のものもあったが、紺色以外のものもある。中国の門の左右の門柱に、春聯といって吉祥の詩句を書いた赤いタテ長の紙が貼ってある。春聯はその年の間貼っておき、福を招き入れる。古くは扉の青と門柱の赤のコントラストがあったと考えられるが、青い扉の左右に赤い春聯があるのにお目にかからない。

中近東では、青い扉に赤い手形が押してあるものを見る。手形は本来は扉の上部の^{まくさ}楣あるいは楣に乗る壁に押したもので、扉の左右の門柱とその上に渡された楣は、青の表象の扉に対する赤の表象であったと考えられる。中近東では、ユダヤ教でもイスラム教でも、入り口で犠牲獣である羊を解体したとき、供犠者は羊の血を敷居に塗りつけ、血と膏にまみれた手で左右の門柱を擦り、血を擦りつける。楣には血で手形を押す。供犠動物は毎年捧げられるが、衰弱する神を賦活するのが目的であった。

ユダヤ教徒の家の入り口のドアの右がわの門柱には、真鍮あるいはガラスでできた2センチ×6センチ×1.5センチほどのメズーザーという容器が埋め込んである。メズーザーは家によっては屋内のどの部屋の入り口の柱にも見られる。ユダヤ教徒は家を出入りするたびに指先でメズーザーを擦り、その指を口に持ってゆきキスする。メズーザーの中には「申命記」6.8-9の句と神を表わす古いシャッドイという語を書いた(羊皮)紙が入

青の色彩表象

っている。

ソロモンの神殿の前にあった2本の青銅の柱は、1本は緑青^{ろくしょう}を吹いた緑色、他の1本は磨き上げた金色をしていた。メズーザーの金色にはこの伝統がある。青ないし緑の伝統は反対がわの柱に隠れているか、ドアそのものの中に隠れていると考えられる。ユダヤ教徒は、入り口の2本の柱のうち、1本には死の神が、1本には生の神が宿ると考えていた。日本では家に88歳の男性がいる場合は黒の手形を押した紙を、女性がいる場合は赤の手形を押した紙を楣の場所に帖る習慣がある。人間88歳になれば、神に近いと考えられ、手形は神のしるしとされた。日本では黒と赤の対立は男と女の対立とされる。入り口の青について論じた。

最近の新聞記事「ジャパン・ブルー 1000年の色」（佐藤久恵）にいう。幕末から明治初めにかけて来日した欧米人にとって、日本の色は青だった。青い着物、青い布団。作家ラフカディオ・ハーンは「青い暖簾をさげた店も小さく、青い着物を着て笑っている人も小さいのだった」と記した（『朝日新聞』'06.8.20）。小泉八雲（1850-1904）より少し前に来日し、明治初期の日本をつぶさに観察したイザベラ・バード（1831-1904）の『日本奥地紀行』（高梨健吉訳、東洋文庫、1973年）にも青い着物の記録がある。下層階級の人びとの着物はほとんど全てが紺色であるから藍草をつくる必要がある。そこで、藍草がどこでも多く栽培してあった（201頁）。人びとの普段着、仕事着は無地や紺の藍染めの布でできていたので、暖簾と同じ布地であったが、有意義性は特に感じられない。

バードは東京から日光に向かうため郊外に出たが、ときどき葬列に出くわした。華麗な衣服をつけた僧侶、口の中でもぐもぐ祈りを唱えている人たち、布で覆われた棺桶を運ぶ青い着物の人たちと、両がわの白衣の会葬者の人たちが行列をつくっていた（42頁）。秋田県では六郷^{ろくごう}の町で、警察の親切な取り計らいで、金持ちの商人の葬式に参加することができた。彼

女は和服を茶屋で借り、頭には青い頭巾を被っていった（171頁）。家の玄関では、青い服装の上に翼に似たうす青い羽織をはおった2人の男が弔問客を接待していた。親戚、友人はいずれも青と白の羽織を着ていた。未亡人は結婚式当日の花嫁のような着物を着ていたので、青や白の絹の着物と共に、部屋は葬式というよりは、お祝いのように見えた（173頁）。

バードが参加した葬式での青い着物、青と白の着物には高い有意義性がある。青は生と死の境界を表象した。青と白の併存は、吉事・凶事の神事で用いられる青白幕、黒白幕にも見られるもので、バードの観察は正鵠を射ている。先の大戦の初期、戦死者の慰霊祭が東京で行われたとき、東京、大阪などの大都市の遺族は黒の和服、洋服で参列した。東北の遺族の中には結婚衣装で参加する未亡人もいた。現代では誕生、結婚、葬式は同じことをするという観念は薄れつつあるので有益な記録である。

B. H. チェンバレン（1850-1935）は『日本事物誌』（高梨健吉訳、東洋文庫、1969年）の「葬式」の項で次のようにいう。神道の棺はヨーロッパの棺と似ているが、仏教の棺は小さく立方形である。仏教では頭を剃った僧侶と棺を運ぶ紺色の服装をしたものがおり、神道では神官は頭を剃らず、曲ったろ縞の帽子をかぶり、棺を運ぶ者は無地の白衣を着ている。1897年（明治30年）に亡くなった皇太后の亡骸なきがらは朱の寢床の中に薫らせて横たわっていた。墓を掘る人びとは、黒い翼を持つ鳥のような服装をしていた。

雄略天皇が葛城山に登ったとき、供として従った百官は皆、赤い紐のついた青摺りの衣服を賜わった。向かってゆく山を見ると、天皇と供奉する百官と寸分たがわぬ人びとが山に登っていた。天皇は怪しみ百官らに矢をつがえさせた。誰何すると、相手は自分は葛城山の一言主ひとことぬしの大神であると答えた。天皇は惶れ畏み武装を解除し、百官の青摺りの衣服を脱がせ、大神を拝み献った。

天皇は季節の変わり目に、神と接触して神の力を受けようとしたのであ

青の色彩表象

る。百官が着た赤い紐のついた青摺りの衣服は境界の儀礼で着用するものであった。儀礼終了後、武装を解除して衣服を脱ぎ、褻^けの服装に戻ったのである。寸分たがわぬ一言主の一行は、天皇の一行の他我で、さらに古くはこれらの他我には、鳥獸、魚、野菜、穀物などが用いられたであろう。天皇はこの場合、狩猟した野生動物を神と共食し力を復活した。

仁徳天皇の皇后イハノヒメは新嘗祭の翌日^{とよのあかり}の豊樂の宴会に用いる木の葉を取りに紀伊の国に出かけた。天皇は皇后の留守中、ヤタノワキイラツメを娶った。これを知った皇后は皇居に帰らず山代^{やましほ}に向かった。天皇の使いのクチコノオミが皇后の御所を訪ね、天皇の歌を伝えようとしたが、表口、裏口で平伏しても引見されず、雨の水溜りの中でひれ伏すうちに、赤い紐の赤い染料が青摺りの衣服に染み込んで衣服が赤くなってしまった。

この話はイハノヒメの嫉妬の話として理解されているが、何らかの儀礼の説話であろう。季節の変わり目に、仁徳天皇は応神天皇の皇女であるヤタノワキイラツメを娶った。天皇の使いは赤い紐のついた青摺りの衣服を着て皇后に報告にゆく。皇后はなかなか引見しない。最後に使者の青い衣服が赤に変わる。この変化は、皇后が天皇の結婚を認めたのか拒否したのかいずれかである。くわしいことは推測することすらむづかしい。これらの赤い紐のついた青摺りの衣服は、天皇と供奉者が新嘗祭や大嘗祭のときに着用した禁色の衣装であったと考えられる。天皇が神事の際に着用する袍は青色であった（倉林正次『祭りの構造 饗宴と神事』NHKブックス、1975年）ので、青摺りの衣装として説話に登場したのであろう。

弘法大師空海の伝記類に出てくる狩場明神は高野明神ともいい、丹生明神と共に高野山の地主神である。弘仁7年（816）、空海が修禪の地を求めて大和国に入ったとき、青衣を着て弓矢を持ち、白と黒の2匹の犬を連れて獵師に出会った。獵師は2匹の犬を放って空海を高野の地に案内させた。丹生明神は狩場明神とは母子関係にあり、2神は赤と青を表象した。単独

では丹は出産、青は死を表象した。

東大寺二月堂の修二会では、3月5日の実忠忌の際、過去帳が読み上げられる。鎌倉時代の僧集慶が承元年間、過去帳を読んでいて、源頼朝の名を読み終えたころ、青衣を着た女人が現れ、なぜ自分の名を読み落としたのかと詰り、消えていった。集慶は低い声で「青衣の女人」と唱えた。その伝統が現代にまで伝わっている。修二会はイラン文化と共に奈良に入ってきた行事で、それは春分を迎える行事が仏教の仮面をつけて行われるものである。仏教の類似の行事は、インド、中国、朝鮮仏教には見当たらない。これは以前論じたので省略する。

青衣の女人は、西アジアの地母神アナーヒター／マリアに相当する。キリスト教の宗教画を見ると、ラファエロのマリア像は赤い上衣に青いマントを着ている。マリアは赤と青の両方を表象する。桜井三枝子「月、湖、織女神——マヤの女神をめぐる伝承と儀礼」（『説話・伝承学』第10号，説話・伝承学会，2002年）によると、スペインに征服されたキチェ・マヤの神話『ポボル・ヴフ』にはキリスト教の影響が明らかにうかがえる。神々は女神と男神が一体をなす二元神の観念がうかがえる。キリストが太陽に、マリアが月と湖の女神に同一視されている。宣教師が三日月と青いマントをつけた「聖母の被昇天」画を示したとき、マヤの月と水の女神と同一視され受容された（26-7頁）。

修二会では3月5日と12日に過去帳が読み上げられるが、青衣の女人と低声で唱えられるのは実忠忌の5日のみである。修二会の3月1日から7日までの上七日は実忠忌に代表される死の儀礼の部分で、8日から14日までは12日のお水取りに代表される。青衣の女人は青衣のみを着ていて赤い紐はつけていないと思われる。赤い下衣の伝承もない。青衣の女人と実忠はマリア／キリスト型、アナーヒター／ミスラ（ミトラ）型の母子神を表現しているので、日本史上の高貴の女性をその背景に考える必要はないと

青の色彩表象

思う。

琉球王族は黄染めの芭蕉布を用いた。上流士族の色は藍染めの水色で、「クルチョー」（黒朝）といわれる濃紺無地の芭蕉布は三司官以下の諸士が着用した。極細の繊維で織られた濃紺の芭蕉布は花嫁の被衣に用いられた。琉球では色の濃淡によって身分を区別したり、吉凶を区別することがあった。濃紺地の緋が祝儀用とされたのに対し、白地の緋は不祝儀用であった。藍地に紅型を染めた風呂敷は祝儀に用いられるもので、青と赤の対照が鮮明である（渡名喜 明「沖縄の藍覚え書」『えとのす』10, 新日本教育図書株式会社, 1978年, 48-51頁）。

藍染めの芭蕉布を花嫁の被衣にする風習は、マリアの青いマントを想起させる。祝儀の引き出物とする紅型風呂敷と共に考えれば、理解し易い。二月堂の青衣の女人の場合は不祝儀であろう。紅型風呂敷に対して藍型風呂敷は不祝儀に用いる。谷川健一はいう。『おもしろ^{みしよ}し』に青しよ御衣を着たノロの舟が波の穂を切ってゆくという歌がある。航海補としてのマリアは青い星と呼ばれ、青い衣を着ている。青は死者の色で、小栗判官が横山大膳に毒を盛られて仮死状態になったとき、青い衣を着た冥府の官人がやってきて熊野の湯につけると治るといふ。そこで照手姫は土車に小栗を乗せ、ゆく先々で人びとの力を借り熊野に登ってゆく（谷川健一・大林太良・松田修「鼎談 色の象徴と変容」『is 総特集 色』ポーラ文化研究所, 1982年, 11頁）。

兵庫県播磨の住吉神社の祭りでは、東郷と西郷から神輿がかつぎ出され、御旅所の前に練り込み、龍王の舞いを奉納したあと本宮に還り、鬪争儀礼が演じられ祭りは終了した。神輿をかつぐ者は青い衣を着用し、別に神輿の前後には1人ずつ柿色の衣を着用した者がいた。柿色の衣を着た前後の人物は神輿を動かす権限を有した（赤松啓介『非常民の民俗境界』明石書店, 1988年, 63-92頁）。柿色は赤と黄が混合してできた色で禁色に類する

色であった。聖なる色で非日常的な色であった。柿色の衣と青の衣が組になって死と再生の儀礼が演じられた。青と黄が混合すると緑ができることが知られていた。ゲーテは『色彩論』（菊地栄一訳、岩波文庫、1952年）で、青は暗く、黄は明るいことから、青と黄は明暗の基本色であり、全ての色はこれから生まれるとした（金子隆芳『色彩の科学』岩波新書、1988年、135頁）。緑の衣は同性愛者O.ワイルドが着用したのでタブーとされたが、ワイルド以前から欧州ではこの色は聖なる色で忌まれた。『is』20、ポーラ文化研究所、1983年、「表象の円環」によると、中国でも『詩経』緑衣にあるように、正しい色とは認められず、公式に使用されなかった（40頁）。

青はある種の意義を伴って用いられることが色彩文化の歴史からうかがえる。青は単なる死あるいは死者の色ではなく、やがて再生・復活する期待の色でもあった。中国の礼では青は天子の色であった。天子は天の子であるので、この世の人ではなくあの世の人であると考え、自らと民を再生させるあの世の天帝の色であった。『礼記』月令第六（竹内照夫著、明治書院、1971年）にいう。孟春の月（太陽暦2月）、天子は青陽殿の北室に起居し、外出には青塗りの天子の乗用車を用い、青いたくましい馬に挽かせ、青い旗を立てる。また天子は青の衣服を着け、青玉を佩^おび、主として麦飯と羊肉を食べる（227-8頁）。

中国の天子が孟春の月に行った行事は青一色であったことが分かる。天子の袍は片面は青色であったが、片面は黄色あるいは白系統であったと考えられる。日本では平安時代の襲^{かさね}で秋に着用するものを菊といったが、表は白、裏は蘇^{すおう}芳であった。あるいは裏は青または赤紫であった。中国人の習慣では、臨終を告げられたとき、病人の衣服を着替えさせる。その中に青の裏地^{ライニング}のついた寿衣が用意される。このリバーシブルの寿衣は臨終が告げられると青を表にして着替えさせる。病人が蘇生したときは、再び服を

青の色彩表象

脱がせて青が裏地になるように着せ替える（丁 秀山『中国の冠婚葬祭』東方書店、1988年、214頁以下）。

死と再生の儀礼である大嘗祭における天皇の袍は青色である。その裏地は恐らく白絹であろう。絹は藍がいちばんよく染まるとは、佐藤、前掲記事がいう。麻がいちばん色素がのらないようである。日本では神事に際して黒白の鯨幕や青白の幕を吉事、凶事の別なく用いる。神道以外の葬式でも両種の幕が用いられる。しかし、死者が青衣を着る習慣を聞かない。死者には屍衣を縫い目を表に出して着せる。日本の場合では、屍衣は青と白が表裏になっていないので、あの世のことは全てさかさになるというふうの説明される。中国では屍衣（寿衣）に藍白の表裏があるが、その他に臨終と共に紙銭の他に黄色い紙を次々と焼く習慣がある。黄は天帝の色で禁色であるので、死者が天帝を賦活するために供犠された古い習俗の名残りであろう。

日本の正月行事や祈年祭の行事は大嘗祭の行事と同じことをしたが、その中に元日の腹赤奏があった。腹赤奏は景行天皇が宇土長浜に釣した故事に基づくもので、太宰府が献上する習わしであった（倉林正次『饗宴の研究（儀礼編）』桜楓社、1965年、68頁）。青衣を着けた天皇の前で赤い肌を着けた者の奏楽があった。祈年祭などと同じく、元日には鶏や豚が供犠されたので、天皇はトーテム動物のエネルギーを摂取して儀礼的に再生したのである。『礼記』によると、天子は孟春（立春）の日、青い柱を立てた。

『後漢書』には、立春の日、夜が完全に明けきらないうちに、京師の百官は皆、青衣を着用し、地方の役人は皆、青い頭巾を被り、青い旗を立てたとある（志第四、礼儀上）。漢代には百官や地方官も青衣を着るようになった。柱や旗は別の論考で述べたように祖先の表象であった。それを青で表わしたのは死と再生の儀礼で、再生を期待させるためであった。前述

したように、イザベラ・バードは東北地方の葬儀に参列したとき、青い被りものをしたと書く。『礼記』によると、立春の日、天子は麦飯と羊肉を食べたという。この2種の食物は極めて日常的な食物のように見えるが、始原の食物に相当するものであったと考えられる。麦は植物トーテムの穀霊が宿り、羊には動物トーテムの霊が宿っていた。穀霊と動物霊は天子を再生させたのである。

中国では西王母説話に青衣の女人の伝承がある。小南一郎『中国の神話と物語り』（岩波書店、1984年）にいう。漢の武帝と西王母が7月7日の七夕の日に会う説話が『漢武帝内伝』に伝えられる。4月の戊辰の日の夜、武帝が東方朔と董仲舒とくつろいでいると、青衣を着けた女人が現れた。武帝が驚いて尋ねると、西王母のいっつけで崑崙山からやってきたと答えた。さらに、武帝が100日の斎戒をしたあと西王母が帝を訪れてくるだろうといって姿を消した。

7月7日、後宮を掃き清め、準備を終えて武帝が待ち設けていると、雲の中から楽の音と共に西王母がやってきた。西王母は紫雲の輦に乗り、9色の斑まだらの竜に引かせていた。お供には50人の天仙が従い、それぞれいろどりの彩のある羽毛のついた棒状の信旗しるしばたを手あわせにしていた。西王母は黄錦の袷を着ていた。2人の侍女は青い絹うちかけの袿を着ていた（28-9頁、小南『西王母と七夕伝承』平凡社、1991年、第3章、森雅子『西王母の原像』慶應義塾大学出版会、2005年、第1章）。

天子武帝と山の神／地母神西王母は年に1度交会する伝承があった。古代西アジアでは春分の日、地母神イシュタル／ヴィーナスの神殿で、その日だけ男神と見なされた多くの男性参詣者と、彼らを境内で待ち受ける、女神の代わりをすると考えられた多くの未婚、既婚の女性の間で年1回の交会が行われた（バビロンの聖婚については、ヘロドトス『歴史』1.199にくわしい）。この交会で受胎した女性は40週280日後に神の子を生んだ。

青の色彩表象

この伝統は、カトリックの3月25日の受胎告知日と12月25日の聖誕に受け継がれている。立秋前後の七夕に行われた聖婚の結果は、翌年4月8日（旧暦）の釈迦の誕生で代表された。北伝仏教はこれに依った。

西王母説話では西王母は青衣ではなく、黄色の錦の袷を着ている。袷はリバーシブルであるので、裏地は白系統の絹であろう。青衣は侍女の衣装になっている。『方廣大莊嚴經』^{ラリタ・ヴィスタラ}誕生品第七に、^{シッダールタ}悉達多が誕生したとき、あらゆる種姓の中に2万の女が生まれ、^{ヤショーダラー}耶輸陀羅（釈迦の妃となる）を最上とし、男女800人の下僕と^{チャンダカ}青衣が生まれ、車匿（釈迦が城を出たときの御者）を最上とした云々とある（足利惇氏先生の講筵に列して以来、半世紀以上が経過した）。青衣は西王母説話と同じに侍女を指す代名詞に貶されている。

西王母の黄衣と侍女の青衣が有意義性のある対照をなす。東西南北は、青白赤黒で表わされ、天地は黄で表わされるので、5色とはこれらの色のことである。天子は青と黄あるいは青と赤などの対照を用いたのである。天子は青竜（竜は背の高さ8尺以上の馬）に青い車を挽かせたが、西王母もそれに倣った。西王母の馬は9色の斑の馬であった。西王母の黄色の袷は黄を中心とした5色の錦の袷であったので、この説話では全てが境界の表象である斑の表象が用いられたことになる。禁色の青は、ここでは価値転移を生じ、侍女の色とされた。中国語では、蒼頭は男の召し使い、青衣は女の召し使いを指す。蒼頭は剃髪した頭を指すのではなく、青い被り物（幘）を巻いたのを原義とするのであろう。古くは天子の礼装であった。『is』20、「表象の円環」によると、前3世紀の『句子』までは青衣、青袍は一般的であったが、以後は身分の低い者の服とされた（40頁）。

中国四川省の北部にある^{きょう}羌族自治区に住む羌族は、西方からこの地に移住した民族と考えられる。彼らの治水神は共工といわれた。『山海経』「海外北経」によると、共工の臣に相柳がいた。相柳は9首の人面蛇身で青か

った。共工を祭る台の4隅の1つに蛇がおり、その色は虎色であった。「大荒北経」には、工共の台には、治水神工共と共に旱魃の女神黄帝女魃が祭られたが、女魃は青衣を着ていた。黄帝は旱魃の神蚩尤^{しゅう}を討って旱魃を祓った（白川静『中国の神話』中央公論社、1975年、108-11頁）。

漢族が羌族に取って代わるが、漢族以前の文化にも青衣と黄色の対照の文化があった。被征服民族の象徴体系が征服民族によって継承されたが、やがて価値の転移が生じたのであろうか。

イランではイスラム教の開祖ムハンマドの子孫を称する者が緑の衣装を着て街頭で金錢を乞うのを見る。緑は一方では春の草木の芽の色で、生命の再生の象徴である。イスラムの伝承によると、神の使者にハジル（緑の人）がいた。『コーラン』18、60-82にいう。ムーサー（モーセ）はあるとき従者を連れて2つの川の合流点に向かった。2人は食料にする干し魚を忘れたのに気付く。実際は干し魚は生き返って川の中に逃げていった。2人は神の使者ハジルの仕業であると知る。

ハジル（緑の人）はヒズル（緑）として広まり、地下を流れる生命の水の守護聖人として信仰されるようになる。類話はシュメル語の『ギルガメシュ叙事詩』にも見られる。冥界の人が緑衣を着ている伝統が極めて古いことを物語っている。緑の人は死者に生命を付与する職能を持つ。神の預言者モハンマドも緑の人であり、その子孫も緑衣を着て自らを他と区別した。現在では緑衣は乞食の特徴となったので、日本のお薦^{こも}被りと同様のタブーの被りものに貶しめられる衣となった。緑や青は生命が萌えいでる色であったのかも知れない。

エジプトにマーハーンという若者がいた。マーハーンはヨセフのように美しかった。ある夜、楽園に招かれて浮かれていると、1人の悪魔が親友に化けてマーハーンを荒野に連れ出して捨てた。マーハーンは数々の冒険をしたあと神に祈っていると神の使いのヒズルが現れ、マーハーンが悪魔

青の色彩表象

に誘惑された最初の場所に連れ戻してくれた。カイロに戻ると友人の誰もが青い衣をまとっていた。彼らはマーハーンが死んだものと思い、青衣を着ていたのである。マーハーンも青い服をつくり、それを身にまとった（ニザーミー『七王妃物語』（黒柳恒男訳、東洋文庫、1971年、29章）。ここでは、緑は再生の色とされ、青は喪の色とされる。マーハーンも郷里に帰り青衣を着たとあるが、一種の呪術であったと考えられる。

イランでは現在も、冬至から40日目、春分の新年の50日前に死と再生の儀礼を行う。この日は立春に相当する日で、参加者は青衣の人と朱衣の人がおり、手にはそれぞれが棒を持つ。祭りの参加者の中心に花輦、花嫁がいて、花輦は白黒^{まだら}の衣装を着る（S. A. アンジャヴィー『冬の祭りと習俗と信仰』第1巻、テヘラン、1973年、73-5頁）。前述した『礼記』や、ことに『後漢書』の立春の記述と契合するものが多いのに驚く。中国における7月7日の七夕の年1回の男女の交会は立秋前後の行事であるので、それに対応する立春前後の年1度の男女の交会有ったと推測される。

歴史的に見ると、古代中近東の年の変わり目は立春より45日後の春分とされたが、立春はそれと並行して、あるいはそれより古くから存在していた可能性がある。別の見方もできる。キリスト教では、復活祭のあと50日して聖霊降臨祭ペンテコステを祝う。復活祭は灰の水曜日から日曜日を除いた40日後（四旬節）の祭りである。仏教の七七^{しちしちにち}日や百日祭、神道の五十日祭、百日祭もある。イランの冬至から春分までの90日の冬の祭りと同じ構造を取る。形式としてはイランの冬の祭りの方が古い。中間で祝う立春祭について、将来くわしく論じてみたい。

イランでは、冬至から40日目の祭りは2月の初めに当たる。立春は2月4日ごろなので少しずれがある。しかしこの中間にある2月初めの祭りに結婚式の模擬が見られることは注目に値する。花輦は白黒斑の衣服を着る。今日のイスラム化したイランでは、シーア派の12人のイマームの殉教（カ

トル)の日には黒づくめの服装をする。婚礼と葬式はもともと死と再生という同じ観念に立脚しているので、そこで用いられる象徴には多くの同一のものがある。カトルの日には白黒斑の象徴を見逃した。哀悼行列の参加者は皆白衣を身に着ける。リーダーの黒衣と対照をなしている。この日に聖者の殺害の表象である青衣を見た記憶がない。立春の祭りでは青衣と朱衣の対照を見るが、哀悼行列ではリーダーや参列者が額、胸、背中を切ったり打ったりしてほとぼしる血で斑に染った青衣は見ない。

11世紀のガズナヴィー朝のスルタン・マスウードの喪の期間、全ての人には白い衣装を身につけた。さらに古く、ササン朝時代(3世紀～7世紀)には、喪に服する者は紺の衣服を着た。11世紀に書かれた叙事詩『ヴィースとラーミン』(岡田恵美子訳、平凡社、1990年)はパルティア時代(前3世紀～後3世紀)が舞台となっているが「黄衣は悪人の衣装、青衣は服喪者の衣装」とある(M.カティーラーイー『誕生から死まで』テヘラン、1969年、261頁)。

フランスの宝石商であり中近東の旅行記を残したジャン・シャルダン(1643-1713)によると、40日続く喪の期間、イラン人は黒い衣装を着なかった。東洋人は黒は悪魔の色として忌み嫌ったからである。服喪者は茶色あるいは死人の顔の色のような灰色の衣服を半分肌を露わにして着る。彼らは生きる欲求もないかのように、1週間、何も食べないでじっとしている。9日目に、男たちはハンマームに連れてゆかれ、頭とひげを剃り、新しい服を与えられる(『シャルダン卿のペルシアおよび他の中近東諸国旅行』L.ラングレ、新版10巻本、パリ、1811年の6巻491頁)。

シャルダンのこの個所は、H.マセ『ペルシア人の信仰と習俗』(パリ、1938年)から引用した。注にいう。さらに古くは、青は服喪のしるしとして着られた。青衣のことはフィルドウシーの『王書』にも出るし、ドフレムリ『グリスタン』337頁の注3にもある。それによると、スルタン・シ

青の色彩表象

ヤー・ロフの王子の喪のために、30日間青衣が着られた。19世紀半ばに歿し、テヘラン南郊の聖地シャー・アブドル・アジームに埋葬された詩人カーアーニーの『雑記』に以下のような文がある。ある人が衣服を紺に染めて欲しいと染め物屋に渡した。翌日依頼した服を受取りにゆくと、染め物屋は、青は喪中の人を着る色であり、彼はこの色が不吉な色であると思ったといい訳けをして注文に応じなかった。

イランにほうろう引きの技術を指導にきた日本人技術者によると、イラン人はほうろう引きボウルの外がわの色を黄色や青色にすると売れないとあって抵抗したという。黄も青もタブーの色で、黄は現在では枯れ木、枯れ葉の色として台所では不吉とされる。青は喪服の色としての伝承がまだ生きているからであろう。1979年のイラン・イスラム宗教革命以前のイランにはユダヤ人が多く住んでいたが、彼らが喪で着用するショール（肩掛け）は黒白の鯨幕ではなく、紺白の縞文様であった。

19世紀の末期のイランでは青衣は別のしるしとして用いられた。『ハーフィズ訳詩集』のあるガートルード・L.ベル（1868-1926）の『ペルシアの情景』（田隅恒生訳、法政大学出版局、2000年、『旅の本、ペルシアの情景』ロンドン、1894年、全20章のうちペルシアに関する部分14章分に当たる）にいう。ガートルードはテヘランを発って西進しカズヴィーンに到着する。ここからカスピ海に向かう道を取り進んでいった。アーガーバーバーに到着する直前、彼女は陽気な顔つきをした青い長衣の行商人に出逢った。男はアーガーバーバーまであと半時間だと請け合った。男はカズヴィーンの宿舎でも、彼女らが横になっているのを見たといった（115頁）。

アーガーバーバーを出てメンジルに向かう途中、ハルザーンのキャラバンセライで休憩した。多くの人が入り出りしていたが、荷を積んだロバと青い木綿の服の上に羊皮の外套を引っかけた男たちが霧の中から不意に現れ、おなじく不意にその中に消えていった。はぜながら燃える枝木が火明かり

をあかあかと放射し、男たちと動物たちの素朴な顔と粗末な身なりの上に明滅させていた（122頁）。

行商人はロバに商品を積み、青い上衣を着て、冬ならばガバーという、足許まで達する羊の毛皮を縫い合わせたマントを引っかけていた。カージャー朝のバーザールは、もっぱら男が買いものをし、女は家の中にいた。男の召し使いを持つ家では、主婦は召し使いを買いものに出した。カージャー朝時代の記録には、振り売りの行商人が家々を訪れ、外の世界の商品を女たちの前に展げ、彼女らを楽しませた。

振り売りは日本でもそうであるが、店を持たない、業界の組織に属さないものによって行われた。現在は自動車などの便利な運搬手段があるが、昔はそうではなかった。ペルシア人の振り売りはひと目で分かった。前述したように、イスラム教の教祖ムハンマドの子孫は緑衣をまとった。乞食する者は緑衣を着て自らを聖化した。青衣を着る者は移動する境界の人と見なされ、ある種の畏怖感を持たれた。差別視されるのを避けるため、青衣を脱いで一般の服に着替えるのがよいと思うが、行商人は服喪の服装をした。ユダヤ教徒は生命の危険に曝されたときでも、自分の姓名を変えない場合があった。ガバーは丈の長い羊毛のついたままの羊皮でつくった外套で、帯もボタンもないマントである。リバーシブルの使用ができる黄色いマントで、毛を外がわに出すか、皮を外がわに出すかによって異なった意味を持った時代があったのであろう。青衣と黄衣は葬式の衣装で、あの世の人が着るものであった。キャラバンサライやチャーイ・ハーネで休憩してお茶を啜るときも控え目な態度を取った。

青衣は聖なる衣装で、天子から喪者さらには乞食の衣装にまで貶された。マセ、前掲書、注にいうようにイランでは服喪に青を用いた。シースターンの英雄ロスタムは、弟のシャガードに裏切られて暗される。ロスタムは、死の前にシャガードを殺して仇を討つ。シースターンは1年間、喪に服し

青の色彩表象

たが皆が黒か青を着用した（フィルドウスイー『王書』黒柳恒男訳，東洋文庫，1969年，410-7頁，同『王書』岡田恵美子訳，岩波文庫，1999年，353頁）。シースターンはイランの東南部に位置するがサカ族の国（サカスターナ）に由来する国である。サカとスキュタイは同一のイラン民族で，2つの民族名の違いは南方方言と北方方言の違いである。

ペルシア神話では，最初の王カユーマルスの王子スイヤーマクは悪魔の息子によって殺害された。スイヤーマクが率いた軍隊は王宮の門の前に列を整え，皆がトルコ石色の衣服をまとい哀悼した（黒柳恒男『ペルシアの神話』泰流社，1980年，16-7頁）。服喪者の衣服がトルコ石色（青緑色）であったことを物語っている。12世紀後半から13世紀初頭に生きたペルシアの詩人ニザーミーの『ライラとマジヌーン』（岡田恵美子訳，東洋文庫，1981年）には，ライラが彼女を恋い慕うマジヌーンの父の喪に服して，紺青の衣を身に着けて書いた手紙を使いの者に託してマジヌーンに手渡す場面がある（131-2頁）。これらの事例を見ると，古い時代，イランでは服喪者は一様に青い衣を着たことが分かる。ロスタムの場合は，青の他，黒い衣を着る者もいたことがうかがえる。

19世紀初頭に書かれた優れた民俗誌であるE. W. レイン『エジプト風俗誌』（大場正史訳，桃源社，1977年）によると，葬列の先頭には数人の盲人が進み，その後に2，3人の托鉢僧が宗団の旗を持って続く。その後に3～4人の学童が続ぎ，1人が『コーラン』の写しを運ぶ。その次に棺架に載せられた棺を3～4人が担ぎ，その後に女性の会葬者が続く。故人の縁者や身内の女たちは，青色の布で頭を覆っている（266頁に挿し絵がある）。著書の注によると，古代エジプト人の墓の壁画に，葬儀の際，頭と同じような布を巻いた女性たちの像が見られる（267頁）。

最近，イスラエル軍とレバノンのヒズボッラーとの戦いで，戦死したヒズボッラー兵の死体を入れた棺を運ぶ様子をテレビで放映していた。棺架

は青で彩色してあり、棺を覆うのは濃い黄色の布であった。被災地での急場の葬儀であるので、棺架を担ぐ人たちは普段着であった。

レインはさらにいう。埋葬のあと、喪に服する。男性は喪のしるしとして何も変更を加えない。女性も老人が死んだ場合には、普段着のままである。しかし、その他の者が死んだ場合は、彼女たちはシャツ、頭覆い、ヴェール、ハンカチなどを藍で青かほとんど真っ黒に染めてしまう。中には手や腕を肘のところまで同じ色に染めたり、部屋の壁を真っ黒に塗りつぶす者もいる。家の主人が死ぬと、じゅうたん、ゲリーム、座ぶとん、長椅子の覆いを裏返しにしてしまう（271頁）。葬式ではさかさまのことでこのような行動をするのか、リバーシブルの衣服の影響があるのか、いずれかであろう。

朝鮮文化では青の伝承は弱まった観がある。洪錫謨『東国歳時記』（姜在彦訳『朝鮮歳時記』東洋文庫、1971年、所収）の五月の項に、端午の扇子について述べる。扇子の色彩も青、黄、赤、白、黒の5色をはじめ、紫、緑、鴉青、雲暗、石磷など多種の色がある。しかし、一般的には白か黒かの2色、黄漆か黒漆かの漆貼り扇が好まれる。また青い扇子は新郎（花婿）が、白い扇子は喪中の人が用いる（100頁）。ここでは白が喪中の色というのは他の文化との共通性があるが、黄や黒が好まれるというのはペルシア文化の伝統では理解し難い。青についてはなおさらである。

皇帝が死去すると、国葬を行った。国葬の直前まで喪輿を担ぐ予行演習に励まねばならなかった。皇帝の柩を運ぶ喪輿は、揺れ動いたりしないよう、刻み足で歩かなくてはならなかったからである。予行演習中に、足を踏み違えたりすると、喪輿の前後に仁王立ちになって乗っていた儀事隊長が、青い染料をその背中に塗りつけた。演習が終わると、青印をつけられた者は呼び出され罰を受けた（安宇植 編訳『続・アヒラン峠の旅人たち』平凡社、1988年、52-3頁）。ここでは、中近東の文化に見られる服喪者の

青の色彩表象

青衣の記憶と考えられるものが痕跡としてしか見られない。

中国では死者は紺衣を着たが、服喪者は素服（白服）を着た。父母の喪の四十九日が終わり、甲問にきてくれた親類、朋友の所にお礼に出かけることがある。紅唐紙の名札の名前の右肩に青い紙を貼り、門口で取り次ぎの者を頼んで挨拶を述べる。主人は出て面会しないが、昵懇の仲の場合、入って面会することもある（中川忠英著、孫伯醇・村松一弥編『清俗紀聞』2、東洋文庫、1966年、169頁）。ここでは中陰明けの再生の入り口での色彩表象である青と赤が用いられている。因みに、中陰は中有ともいい、梵語アンタル（中間）バヴァ（存在）の漢訳である。陰とは死後の暗黒の世界に入る前の中間の薄暗い存在である。

あの世は青いという観念は、暗黒のあの世という観念と並存した。唐臨『冥報記』の中の話に、知事王範の妾の桃英が範の出張中に2人の範の部下と密通しているのを家令に見られた。2人は露顕するのを恐れて、桃英と家令が密通しているとぞん言した。王範はよく調べもしないで桃英と家令を殺してしまった。家令は幽霊になって王範を殺しにゆくが、桃英の死体は女の亡者を入れておく女青亭に入っていた（前野直彬編訳『唐代伝奇集』2、東洋文庫、1964年、3-4頁）。青は死者の色であると同時に、あの世の雰囲気であったことが分かる。しかし、あの世に住む楊貴妃は青くなく、その侍女は西王母の侍女と同様に青衣を着ている（前野、前掲書、1、1963年、所収、陳鴻「長恨伝」）。

江戸時代に「百物語」という怪談会があった。星野匡「日本の妖怪」（『月刊百科』平凡社、1982年、7月号）はいう。まず灯心を100筋ともし、行灯を青い紙で張って、部屋の中が薄青くなるようにして雰囲気を出す。座中の刀剣類は隠してしまう。集まった人は恐ろしい話を1話ずつ話してゆき、1話終わるごとに灯心を1筋ずつ消す。100話目が語り終えられて、1筋残った灯心が消されて真の闇になると必ず不思議なことが起こるとい

われていた (32-6頁)。

仲松弥秀「二つの神を祀る島——祖霊神と来訪神——」(『えとのす』10, 1978年, 所収)は沖縄にみられる青に基づく地名に的確な解釈を与えている。沖縄には「奥武」という地名があちこちにある。古くはアオと発音していたらしい。「おー」という地名の所はみな古代の墓所である。祖霊のいる場所にも、来訪神の去来する場所にもアオという地名がついている。死んだらアウの島, タウの島へゆくと古老はいう。アウは青で, タウは唐であろう。黒は暗く無の世界であるが, 赤と黒の中間の青は暗黒の無の世界でもなく, 明るい現実の世界でもない。その中間の世界である (47頁)。

沖縄に限らず, 本土においても青山 (人間^{じんかん}到る所^{せいざん}青山あり), 青谷, 青墓 (小栗判官伝説にも出る)も古代の葬所であり墓地であった。谷川健一によると, 対馬の青海^{おうみ}や青の峯^{あお}もそうで, 沖縄の青の島^{おう}も人を葬った地先の島である (『東アジアの古代文化』71号, 1992年, 41頁)。沖縄の人が死体を目と鼻の先の小島に埋めることから青の島は死者の島と考えられる (51頁)。

『後漢書』に編入された『続漢書』輿服志にいう。皇室の女性が廟に入る際に着るのは上部が紺, 下部が皁^{くろ}。養蚕には上部が青, 下部が縹^{そらいろ}。共に深衣 (ワンピース)の制による (小南, 前掲書, 43頁)。廟に入る女性のワンピースは薄明と暗黒を表象した。養蚕服の1対の青にも意味があったに違いないが, その意味はよく分からない。日本の神事 (祝儀, 不祝儀いずれも), 葬儀において, 黒白の鯨幕と青白文様の幕が使用されるのも, これらの伝統と関係するものであろう。神事では紅白の幕は黒白や青白幕と併用されない。

青は黒と対になって薄明と暗黒を表象するという観念は広く見られた。『グリム童話集』KHM116「青いあかり」では, 魔女の家に泊まった1人の兵隊は, 井戸の中から青いあかりを取り出すよう命じられる。兵隊が

青の色彩表象

青いあかりで煙草に火をつけると黒い小人が現れ、何でも望みをかなえてくれた。兵隊は国と国王の姫を手に入れた（野口芳子『グリム童話と魔女』、勁草書房、2002年、38-9頁）。この民話が語られる背景には、ゲルマン民族に伝わる王の即位儀礼の名残りがあ

る。王に解雇された兵隊は、仮の王の分身である、仮の王は地母神である魔女（キリスト教の聖母マリアのため、先住の山の神と地母神は魔女に墮とされた）の世話になる。黒い小人というのは、地下水脈の守護神で、緑の人として信仰されたヒズルのことで、ヒズルにも青と黒の2つの色採表象があった。統治末期の王から逃亡した仮の王である兵隊は、地母神の神殿で掘られた井戸の中で、ヒズルによって永遠の生命を与えられ、国土と王女を手に入れる。

朝鮮文化で神降ろしをする巫堂（^{ムーダン}巫女）の起源をめぐる説話。国王の世子（皇太子）には男子がなく、女子ばかり7人が生まれた。王は怒り、7人目の王女を箱に入れて棄てた。年老いた国王夫妻の病いが篤くなったとき、国王が王女を棄てたからだという占いが出た。ある日、夢に6人の青衣の童子が現れ、上帝の命で王の生命を助けにきた。王女を訪ねて、その霊薬を摂れば救われるだろうといった。そこで大臣が旅に出ると、鳥が西域に導いた。王女の薬のお陰で国王夫妻は蘇生し、王女は巫堂の王となった（林鐘国『ソウル城下に漢江は流れる』朴海錫・姜徳相訳、平凡社、1987年、198-9頁）。

この説話では、青衣の使者は男児である。青衣は女人であるという伝承から外れている。巫堂は神界と人界の中間にあって神降ろしをする者である。彼女らの集団の祭りで始祖王を祭る際に語られる説話が上述したものである。青衣や鳥は神界に接する象徴的色彩と考えられる。祭場の巫女らは、白衣に青または赤の裳を着けたのであろう。

阿部謹也『刑吏の社会史』（中公新書、1978年）にいう。ケルンでは大

聖堂広場で裁判が開かれ、判決が下されると杖が折られ、犯人が刑吏に引き渡される。刑吏は手を被告の右肩に置く。その瞬間、被告は賤民である刑吏の手に落ちる。刑吏は被告を聖ヨーハン教会の傍の壁にはめこまれていた青い石の所に連れてゆく。彼は被告の背中を3回青い石に押しつけ、いう。「汝を青い石につけたり。汝は父母の許に戻ることなからん」。その後、徒弟が被告を荷車に乗せて刑場に連れてゆく（169頁）。

杖は権威の象徴である権杖で、それは都市、個人の祖先の象徴であった。それを折るのは、祖先の庇護からの離脱を意味した。青い石は聖所である教会の入り口にある境界石で、あの世に参入するとき、この世を向きながら後ろ向きに進んだのである。このような青い石はボンにもあり、子供はその石の上で頬を打たれた（169-70頁）。サムエル・ジョンソンは自伝の中で、子供の頃、父に連れられて教区の境界に置かれた石の上に座られ、頬を打たれたことを述べている。父はいつまでも教区の範囲を忘れないようにという意味で、サムエル少年の頬を打ったのだと回顧している。伊勢神宮の拝所に到る石段はこの種の青い石から成っており、雨の日はことさら神々しさを増す。

定方 晟『アショーカ王伝』（法蔵館、1972年）にいう。アショーカ（憂いのない）王の弟ヴィータショーカ（憂いのない）は兄の王と違い外道を信奉していた。兄は方便をめぐらし、自分の王冠と帯を弟につけさせ、7日間、王にさせた。7日が過ぎると弟は殺され、王位は兄に戻ると取り決めた。弟は7日目近づくとつれ、門の所に立つ青衣を着た死刑執行人の姿を目にし、死の恐怖から王の生活の喜びを味わえなかった。ヴィータショーカは仏の教えに導かれ仏門に帰依した。彼は出家し、最期は牛飼いによって首を斬られ、平然と死に着いた（137-59頁）。

インドに限らず、欧州、西アジア、中国にわたって、死刑は城門の所で執行された。執行人は青衣を着ていた。青い扉や青い暖簾や入り口の赤や

青の色彩表象

黒の手形が想起される。刑を受ける者が青衣を着るという記述はない。マヤ文明では、犠牲者は青く塗られる。神官は犠牲者の生ま皮を剥がし、それを自分の裸体の上に着る（『石田英一郎全集』7、筑摩書房、1971年、237頁以下、『マヤ文明』〈1967年〉）。マヤ文明では犠牲を殺す神官は神の代理人である。供犠される犠牲は神の他我で、新鮮な心臓を持った若者が選ばれた。毎年、季節の変わり目になると衰弱してくる神を他我の血と心臓で活性化したのである。インドの執行人も神の代理であった。受刑者は罪人であっても、そのエネルギーで神を賦活したのが元来の型であった。

フランスの死刑執行人の家系にサンソン家がある。ルイ16世を処刑したシャルル＝アンリ・サンソンは、執行人の伝統的な服装である青い半ズボンをはき、刑架と黒い梯子の刺繍をほどこした赤い上着を着て、淡い紅色の2角帽を被り、剣を差していた。15人の助手と下僕は、それぞれ黄褐色の革の前掛けをしていた（マルタン・モネステイエ『死刑全書』吉田春美・大塚宏子訳、原書房、1996年、205-6頁）。執行人の青、赤、黒や助手らの黄褐色は、上来見てきた複合的色彩表象と合致する。

早稲田大学古代エジプト学調査隊（吉村作治隊長）は、エジプトの首都カイロ南方22キロの地点にあるダハシュールで3800年前の完全に封印されたままの木棺に収められたミイラを発見したと発表した（2005年1月22日付各紙に報じられた）。木棺は黄色く塗られ、水色でヒエログリフが書かれていた。ミイラはセヌウという男性で軍事関係の行政官であった。ミイラは真っ白な麻布で覆われ、顔は青や緑で彩色されたマスクをつけていた。胸衣には、太い赤の横縞が3本認められた。

古代エジプトではミイラ完成時、顔面を覆うマスクは頭髮を含めて青く塗った。もっと古くは、ミイラにシャブティ（のちにはウシャブティ）という小型の人型（木製、石製など）を1体副えた。シャブティはミイラの代理者で、のちの時代になるとその数は増え、複数個から365個、さらに

700個にも及んだ。これらの多数のシャブティは箱の中に収められて副葬された。シャブティは本体のミイラに似せてつくったので、顔面は青く塗った。

ツタンカーメン王のミイラの顔を覆うマスクは、金と青の縞模様のネメスという頭巾と灰色がかかった緑の付けひげと赤や薄い青の胸飾りから成っており、総重量は11キログラムあった。ツタンカーメン王は父王の用いた青とは別の青を合成して使用した（宇田応之「王のブルー新たに合成」『朝日新聞』夕刊，06.10.10）。

矢島文夫＝文，遠藤紀勝＝写真『カラー版 死者の書』（社会思想社，1986年）によると，アニのパピルス『死者の書』には，アニが死んで鷹の姿をしたホルスによって椅子に座ったオシリスの前に導かれる絵がある。オシリスは2本の緑の柱に支えられた緑の天蓋の下で王座に座る。オシリスは顔面は緑で，2本の緑の角のついた白い帽子を被り，緑の笏を持ち，その着衣は模様をついた白衣である。後ろに立つイシスは顔は素顔のまま，緑衣を身につける。イシスの横に立つ女性は茶色の衣服を身につける。アニは白衣をつけ，顔面は何の化粧もしていない（96-7，136-7，148頁）。ミイラに付属する2種類の魂魄を表象する鳥の羽根は緑である（132-3，144頁）。ウジャトといわれるホルスの片目の枠は緑で絵かれる（105頁）。

死者の口の中に入れるスカラベ（フンコロガシ，陶製，石製）は青い。ギリシア人が死者がステュクス川を渡るとき，渡し守りカロンに渡す銅あるいは銀のオボロス貨を口の中に入れてやるのがこれに対応する。スカラベに較べるとオボロス貨は緑ないし黒である。日本で死者の口に入れてやる三途の川の渡り賃という鑿銭が同類である。イラン人が死者の口に入れてやる瑪瑙めのうは緑のものもあるが桃色か白である。中国人が死者の口に入れてやる含蟬は白い。

エジプトでは緑は独立した色で，青とは区別されていた。その他に灰青

青の色彩表象

色があった。100万年を表わす神は灰青色であった。葬儀の門は、紺・赤黄・紺・緑・紺・赤黄が織りなす格子文様を正面につけており、門の上部には梯子が横たえてある（104-5頁）。青や緑が死や永遠を表わし、これらの色の混交と梯子が永遠の死の世界への入り口とされたことが分かるが、詳しい意味は分からない。

エジプトの地下の王オシリスは青い顔をしていた。その妻イシスと連れの女性は素顔であるが、黄や茶色の衣服を着ていた。前出のアニのパピルスの絵には、途中で緑の羽根をつけた鳥が出てくる。アニの死と再生を物語るのに必要な小道具であった。朝鮮文化の結婚式では緑の衣服を着た花婿と赤の衣服を着た花嫁が机を真ん中に置いて向かい合って座り、机の中央には脚を縛った鶏を置き、花婿の足許には木製の雁を置く。木雁は結納として前もって衣料と共に花嫁の家に届けたり、花婿が馬に乗って花嫁の家に向かうとき、大切に抱いて持ってゆく。

緑（青）と赤の取り合わせは生命の再生を表象した。前出『七王妃物語』では、エジプトのマーハーンは魔物によって地獄の苦しみをなめさせられ、神に救いを求めた。そこに顔の赤い緑の人ヒズルが現れ、生命の水を飲ませた。すると、マーハーンは最初に悪魔に連れ出された安全な場所に戻っていた。庭の扉を開いて荒れはてた地を通りカイロに戻った（199頁）。

エチオピア語版『アレクサンダー伝説』によると、アレクサンダー大王の軍隊の指揮官マツンは、大王からアダムが楽園から持ってきたという宝石を与えられ、宿営地を出発した。途中、道に迷うと石を路の上に投げた。石は光りを放ち、軍隊は道に迷うことはなかった。マツンは「生命の水の井戸」に到着したので、携帯した干し魚を水でふやかそうとした。魚は水に触れると泳ぎ去った。マツンは水に潜り、体を洗い、水を飲んだ。マツンの体内の肉は青緑色に変わり、衣服も青緑色に変わった。そこでマツンは緑の人（ヒズル）と呼ばれた（大阪外国語大学口承文芸研究会『世界口

承文芸研究』第3号, 1982年, 479頁)。

ペルシア語版などの『アレクサンダー伝説』では、不死を希求するアレクサンダーは地下水脈の主である緑の人ヒズルが打ちつける石から発する光を頼りに地下の川を進が、途中で2股になった場所で道に迷い、ヒズルとは別の支流をたどる。アレクサンダーの到達したのは死の川の水源であった。ヒズルは生命の水の水源に到達し、干し魚は水の中に泳ぎ去った。ヒズルはもともと緑の人で不死・再生の付与者とされた。アレクサンダーは川を遡る途中、緑の鳥と対話し、人の寿命のはかなさを知らされる。前述した『グリム童話集』KHM116「青いあかり」では、ヒズルを表わす黒い小人と青い光がモチーフになっている。ヒズルが石を打って光を出す話題は忘れられたようである。

『山東民話集』（飯倉照平・鈴木健之編訳、東洋文庫、1975年）所収の「狐の嫁さん」の中にヒズルの特徴が見られる。大^{ターチョワン} 壮という貧しい若者が母親と2人で住んでいた。あるとき、山に薪を取りにゆくと、緑の着物を着た娘と、赤い着物を着た娘を見た。ある日、大壮が山で仕事をしていると、あの赤い着物の娘が薪をかかえて大壮の所にやってきた。大壮は、この娘の名が^{アルニ} 二妃で、緑の娘が姉であることを知った。大壮は二妃と結婚し、子供を1人儲けた。大壮は薪取りの帰りに、二妃が1人の老人と話しているのを見た。家に帰ると、二妃は大壮に今日かぎりでは別れなくてはならない。もし自分に会いたいなら、ここから西南に1000里ほどいった所に^{えんじゅ} 槐の木がある。木の根元に百里洞という洞穴があるので、そこへ自分を訪ねてくるようにいった。

二妃は口の中から赤い玉を吐き出して、それを大壮に与えた。二妃は狐に姿を変えて大壮の前にうずくまっていた。大壮はいわれた通り槐の木の洞穴を降りて進んでゆくと楼門が現れた。門を開けてくれたのは緑の着物の姉であった。二妃は狐の姿のままであった。狐の口に玉を入れてやると、

青の色彩表象

もとの二妃の姿になった。2人は父親を酔わせ、口の中から白い玉を盗みとり、地上のわが家に帰った（112-24頁）。

大壮は赤と緑の2人の娘に助けられる。ヒズルは男性であるが、姉妹は女性である。それでも、ヒズルと同じように緑と赤で表象される。ヒズルは2個の（宝）石を打ちつつ、その光で地下洞を進む。狐は赤と白の玉をもって大壮の家に戻る。小人の老人ヒズルは実は2人の姉妹の父であった。姉妹の着物の色は、ヒズルがもつ2色の表象である。グリムでは井戸と黒い小人と青い光であるが、「狐の嫁さん」では洞穴と白い老人と赤白の玉になっている。2人の姉妹の姓は胡である。外来の民話であることを示唆している。

中国内モンゴル自治区のオルドス地方に伝わる「チンギス・ハーン」物語はいう。あるとき、チンギスは1000頭の黄色い犬を連れて狩りに出た。白い狐の悪魔が現れて逃げていった。チンギスは追ったが、どうすることもできなかった。突然、黄色い老人が現れチンギスをなじった。チンギスは老人を殺そうとしたが、黄色い犬が現れたので老人を見逃した。翌日、チンギスが火打ち石で煙草に火をつけて吞んでいると、緑の長衣を着た1人の美女が現れた。チンギスは美女を野営地に招き入れて交わろうとした。

そのとき、昨日の黄色い老人の3人の子供が入ってきて、その女は悪魔の白狐であると告げた。チンギスは女の頭に切りつけると、女は消えていなくなった。女は白狐になって戻ってきたが額を切られて1片の皮が地面に落ち、地面全体に光がたなびいた。黄色い老人は息子らと平穩に過ごした（A.モスタールト『オルドス口碑集』磯野富士子訳、東洋文庫、1966年、18-25頁）。

アレクサンダー伝説のヒズルが黄色い老人として出てくる。緑衣をつけた女は「狐の嫁さん」の姉に対応し、死を象徴する。モンゴルでは悪魔として語られる。この白狐の悪魔の額の皮は地上に落ちて光を放つ。チンギ

スは煙草の火をつけるのに火打ち石を使うが、これはヒズルが打ちながら光を出し、暗闇を進んだ2つの石に相当する。

緑は青と同系と見なされたが、青に黄を混ぜると緑になることは後期旧石器時代に顔料を使用するようになって以来知られていたもので、黄の意味をどうとるかによって、文化によって表わす意味にも多少の違いがある。エジプトのナイル川の氾濫の神ハピはオシリスと同一視され、儀礼的葬儀は氾濫の最高時に行われた。ハピは男性の特徴と女性の特徴である胸を持つ両性具有神であった。ハピは豊穡神であり、ハピ自らオシリスに授乳することによりオシリスを復活させた（V. イオンズ『エジプト神話』酒井傳六訳、青土社、1988年、208頁）。

葬儀の神であり復活の神であるハピの色彩表象はよく分かる。石上玄一郎『エジプトの死者の書』（人文書院、1980年）によると、ミイラをつくる時、巫者はソーダで死者の口を清め、舌の上に緑色でマアトの印を描いた（107頁）。マアトは緑の羽根で表わされ、死後の審判では死者の心臓はマアトとつり合いが取れるようにアヌビス神によって天秤にかけられた（前掲、矢島・遠藤『死者の書』92-3頁）。

マアトは真理、正義、宇宙的秩序を表わし、死者の心臓がマアトの羽根と過不足なく均衡を取ると、死者は死の世界の秩序と一体化できると考えられた。緑の羽根の鳥は実在する。人語を真似るオウムやインコがそれで、マアトの鳥やカヤバの鳥はオウムそのものではなくても、それから類推されたあの世の鳥と考えられたのであろうか。前述したように、バードやチェンバレンは、葬儀や墓掘りに従事する人は青い羽根をつけていると観察しているが、これは青、紺かみしもの袴かたぎぬの肩衣を指す。イランの緑衣や青衣についてはすでに触れた。

青と緑の解釈は、その禁忌のせいで文化によって解釈は様々である。アルメニアでは、青または緑の瞳の持ち主は邪視の持ち主とされる（G. へ

青の色彩表象

イスチングズ『宗教・倫理百科辞典』5, エディンバラ, 1912年, 610頁)。イラン北部はアルメニアやロシアに接していたので同じ俗信が流行している。さらに琥珀色の瞳も良くない。エジプトの色彩観について, C. マロニー編『邪視』(コロンビア大学出版, 1976年)は, A. アミーン『エジプトの慣習・伝承・解釈事典』(カイロ, 1953年, 58頁)を引いて, エジプトでは緑は不吉で青は吉であるが, 緑と青は混同されるという(82頁)。日本では『延喜式』治部に, 「雀, 青鳥, 赤鳥, 三足鳥は上瑞, 白鳥, 蒼鳥, 翠鳥を中瑞と見なす」とある『延喜式』は10世紀の成立であるが, それ以前の8世紀以降の弘仁式, 9世紀後半に成立した貞観式じょうがんを踏まえたものなので, 青, 赤と白, 蒼, 翠の格式は古くから伝わっていたと考えられる。

中野美代子「青い鳥 中国民話の古層」(前掲『色』所収)によると, 漢の武帝に愛された巨霊という侏儒は, 東方朔に睨まれ, 青い雀と化して飛び去った。景帝の后が武帝を生み落としたとき, 青い雀が群がってきた(83-4頁)。青い雀はインドの伝承にも見られる。『法顕伝・宋雲行記』(長沢和俊訳注, 東洋文庫, 1971年)によると, 仏はブツダガヤで成道し, 悪魔を退散させた。そのとき, 500匹の青雀が飛んできて仏の周りを3度飛び回って去った(111-2頁)。

中国には古来, 「燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや」(『史記』陳涉世家)ということばがあるので, 聖鳥としての雀の他に, つまらない小さい鳥という意味もあった。雀はイランでも聖視されるので, アジアばかりか, アフリカでも聖視されたかも知れない。「アニのパピルス」に見る青い鳥はオウムやインコではなく雀の可能性が大きい。外観は雀に近いからである。

『延喜式』の三足鳥は何をいったのであろうか。神武天皇を先導した鳥は何本の足を持っていたのか不明であるが, 中国の日中の鳥は3本足である。『日本書紀』によると三足雀がいた。天武天皇11年8月13日, 筑紫つくしの

おおみこもち

太宰が三本雀が現れましたと報告した。翌12年1月2日の賀正の礼で、その三足雀を宮廷に献上した。『扶桑略記』では、天武天皇9年8月、年号を朱雀元年とした。太宰府が三足赤雀を献じたので年号とした、とある。

中野、前掲論文は、『搜神後記』に出る話の中に「決して開けてはいけない」といって貫った袋を本人の留守中に家人が開けたところ、中から青い鳥が飛び去ったという話がある。浦島太郎の玉手箱と同じもので、中に閉じ込められた煙や青い鳥は寿命や祖先霊と考えられる。それは宇宙秩序でもあった。エジプトの青い鳥の理解がないと理解し難い現象である。漢の武帝誕生のとき、青雀が群がって飛来したのは、祖霊が新生児を賦活するためにやって来たのである。釈迦の降魔のときに飛び回った青雀も同じ精神である。

『万葉集』巻第16巻末3889歌「人魂ひとたまのさ青をなる君がただ独り逢あまへりし雨夜よの葬はふりをそ思ふ」では人魂は青（さをはさあをの略）で表象された。雨夜の埋葬地では、死体が出す黄燐の青白い燐火が古代人にとっての人魂の証しであった。東京大学仏教青年会で竹内健が16年に亘って主催した古代信仰研究会（古信研）の命題の1つに「氷蔵信仰」がある。6月1日は東京都の製氷組合の氷の日である。氷の月名は水み之月なづきという。氷は氷室に貯蔵された。平城宮や平安宮は、まず氷室を基点として設計された。大嘗祭における新帝の即位に際し、新帝が頭に戴く、先帝の形代である拔箭リングの入った柳篋は氷室に保管された。氷室を守る巫女は青女、青鳥と称された。氷室は聖なる井戸、穴で、男系の新帝を守る祖霊の表象である巫女によって守られたのである（真喜志さき子『竹内健師講義録 古信研公理常用語彙畧解』琉球信仰史研究所、2004年、19-23頁）。

青は境界の表象であった。なお、色彩表象に関心を持たれた方は、ミシェル・パストゥロー『悪魔の布』（松村剛・松村恵理訳、白水社、1993年）、同『青の歴史』（松村恵理・松村剛訳、筑摩書房、2005年）、徳井淑子『色

青の色彩表象

で読む中世ヨーロッパ』(講談社, 2006年)を参看されたい。

The Symbolism of the Color Blue

Eiichi IMOTO

The color blue is seen on the borders of the inside and outside of a home, in this world and the next world, so it is the color of the funeral, the marriage and other rites.

Messengers from the other world used to wear blue clothes, and maids or servants of this world had blue clothes on. The executioner's clothes had something blue and the condemned criminal's had, too.

A sacrifice, human or animal, had something blue. A man on his deathbed would change his usual clothes for blue ones. The dead person was thought to be an offering to the gods. The color blue was the symbol of giving vigor and energy to the god. The blue colors were used from the royal divine families to the common people.

On the New Year, Emperors of China and Japan put on blue clothes. The Virgin Mary also wore a blue mantle.